

会長就任にあたりまして

早 下 隆 士

令和3年6月に開催されました日本分析化学会総会・理事会に於いて、2021・2022年度の会長職を拝命致しました上智大学の早下隆士です。本学会は1952年に設立され、2021年で設立70周年を迎えました。私自身は博士後期課程までを九州大学において、上野景平教授（1985年度本学会会長）、高木 誠教授（2001年度本学会会長）の下で学び、その後、神奈川大学、佐賀大学を経て、東北大学で助教授として寺前紀夫教授（2013・2014年度本学会会長）の下で研究を行って参りました。本学会の重鎮の多くの先生方のご教示の下に学ぶと同時に、先生方の本学会に対する真摯な思いを目の当たりにした長い年月を経て会長職を拝命致しますことは、大変光栄であるとともに、よりいっそう身の引き締まる思いでおります。

さて2018年に当時の岡田哲男会長のもとで副会長に就任しましたおり、学会の財務状況が危機に瀕していることを知りました。正直に申しあげれば、本学会はいつ潰れてもおかしくない状況にありました。学会の運営の健全化を目指すために2019年からは、会長に就任された内山一美先生の下で副会長・業務執行理事として、岡田前会長の協力を得ながら、抜本的改革に取り組んで参りました。誠に残念ながら2020年8月に内山会長は不慮の事故により急逝されましたが、亡くなる前夜遅くまで学会改革について話し合いを行って参りました。残りの任期を引き継いで会長に就任頂いた金澤秀子先生にもその後、ご支援を頂き、会員の規模に見合った本来あるべき学会の姿となるよう体制作りを進めております。

具体的には、岡田前会長を中心とするタスクフォースを2019年に設置し、その答申に基づく改革を不退転の覚悟で進めています。少子化に伴う昨今の現状を鑑み、近い将来の会員3000名でも対応できる学会の運営体制を構築すべく、1) 職員人件費の大幅削減、2) 本部業務の抜本的見直し、3) 研究懇談会や年会、討論会などの各委員会による自主運営の実施、4) 「ぶんせき」誌の電子化、*X-ray Structure Analysis Online* の廃止、*Analytical Sciences* 誌の編集機能を残した形での外部委託化、5) 会員管理システムの新構築による各種業務の効率化を進めております。本改革案は、2020年度理事会にても承認され、すでに各委員会への説明も実施していますが、会員の皆様には機会あるごとに、抜本改革の重要性をますます訴えて行きたいと考えています。この改革は、私の会長任期の間に何としても実現すべき課題です。

現時点で、これらの改革は皆様の努力により少しずつですが形に表れ始めており、2018年と2019年に計上した大幅な赤字は、2020年度には改善の兆しが見えてきました。コロナ禍において、事業収入も大幅に減りましたが、それ以上に会議費など支出の削減が出来たことも一つの要因です。ポストコロナでは、以前の学会運営に戻すのではなく、コロナ禍で学んだオンラインによる事業や会議の効率化を積極的に導入し、新しい運営体制を作り出すことが非常に重要です。

当学会の会員である意義は、何と言っても分析化学に関連する最新研究について、分析化学討論会や年会に参加し、研究発表はもちろんのこと、分析化学技術に関する意見交換を行えることや新しいアイデアをいち早く収集できることにあります。それに伴い、産官学の様々な会員同士の交流はより活発なものになります。本会の機関誌「ぶんせき」で提供する分析化学の最新研究動向に関する情報、入門講座、講義、技術紹介も貴重な情報源です。本部・支部で開催される講習会やセミナーにおいては直接に基礎的な知見を得ることも出来ます。

昨今、多くの学術団体において学会運営が難しくなる中で、和文誌の廃刊があいついでおります。本会では分析化学に関わる研究者・技術者の裾野を広げる意味においても、和文誌「分析化学」の刊行を継続することは重要な役割を担っていると考えております。国際学術誌である *Analytical Sciences* 誌は、編集委員会の努力で2020年にはIF 2.1を達成しました。この実績はわれわれの機関誌がアジアの分析化学の基幹をなす英文誌に成長していることの現れです。国際会議に目を向けると、1年延期となり本年10月に台湾で開催される Asian Conference on Analytical Sciences 2020 (ASIANALYSIS 2020)、日本で開催予定の International Congress on Analytical Sciences (ICAS 2021) があります。この他、全国7支部が主催する交流事業、各種研究懇談会の活動、学会賞、奨励賞、女性 Analyst 賞などの各賞の発表、次世代の若手研究者を育成するために各支部で行われている若手の会の活動など、本学会は、分析化学に関わる研究者・技術者の有益な交流の場となっていることは間違いありません。

先人の築き上げてきた本学会を、更に魅力的に発展させることは私の常用な使命です。そのためには、安定した財政基盤に基づく学会運営体制への再構築が不可欠です。会員の皆様、理事会構成員、および事務局の皆様のご理解とご協力を、どうぞ宜しくお願い致します。